

■プロコフィエフ／交響曲 第5番 変ロ長調 Op.100

セルゲイ・プロコフィエフ(1891-1953)の音楽は時期によって大きく作風を異にする。とりわけ初期に海外で大いに注目を集めた西欧流の革新性、たとえばモダンな和声やモーターのようなリズムと、帰国後にロシアの社会状況のなかでよみがえらせた音楽的伝統、たとえばベートーヴェンなど幼いころから身近にあった古典や彼の内なる瞑想的な抒情性は実際、対極的にみえる。交響曲第5番はソ連復帰後、14年ぶりに書き溜めておいた主題を駆使してまとめられた交響曲で、壮大なスケールを誇る。この二分法からすれば明らかに後者、つまり社会主義リアリズムに迎合した作品となる。実際、プロコフィエフに新たな前衛音楽を期待した西側からは非難を浴びる一方、国内では成功作として評価された。帰国後、しばらくはカンタータや映画音楽、オペラ、バレエ音楽に集中していた彼がようやく書き上げた交響曲として、内外からの反響が大きかったということだろう。だが、細かく内容を見ていくと、いかにも保守化したかに見える音楽の中に、プロコフィエフが若い頃から開拓してきた前衛的な書法も紛れ込んでいることに気づく。変節したというのではなく、むしろ、それまで培った書法をまとめながら大きく前進したと考えるべきなのかもしれない。それはベートーヴェンの「運命」やショスタコーヴィチの名誉回復となった第5番と同じく、大きな足跡を残す第5番だったのである。

全体の音調としては、チャイコフスキーやブラームス風のロマン派交響曲とのつながりが色濃く表れているものの、ショスタコーヴィチの交響曲のように、調性で書かれていても遠隔調へと巧みに逸れていく転調が多用され、和声もモダンな響きをもっている。第1楽章アンダンテはソナタ形式。展開部は楽想を多層的に重ねていくのが特徴。第2楽章アレグロ・マルカートはちょっとおどけた感じの、いくらかグロテスクな印象のあるスケルツォ。リズムの執拗な反復も現れ、若い頃の書法がよみがえっている。第3楽章アダージョは抒情的な緩徐楽章。弦楽器の分散和音を背景に主要主題が次々と歌い継がれていく。序奏で始まる第4楽章アレグロ・ジョコゾは祝祭的なフィナーレ。自由なロンド形式である。

白石美雪

楽器編成：

フルート 2、ピッコロ、オーボエ 2、イングリッシュホルン、クラリネット 2、E♭管クラリネット、バスクラリネット、ファゴット 2、コントラファゴット、ホルン 4、トランペット 3、トロンボーン 3、チューバ、ティンパニ、ウッドブロック、タンブリン、トライアングル、小太鼓、シンバル、大太鼓、タムタム、ハープ、ピアノ、弦五部

※スコア上の表記